

アメリカ社会の「今」

愛知教育大学附属高等学校
原 宏 史

1 はじめに

アメリカ合衆国ほど様々に語られる国家はない。様々な民族の混在する多種多様な言語、文化、歴史的に極めて特異な成立過程。今日政治的、経済的、社会的に世界に多大な影響を与える国家となったアメリカ合衆国の全貌を短期間のフィールド・ワークで明らかにすることは困難である。もとより、広大な国土、膨大な人口、そして多様な価値観を併せ持つこの国家を一口で要約することは不可能といってよい。そこで、今回筆者が試みたことは、現地での取材の中で、アメリカ合衆国の街角に日常見出すことのできる、さまざまな事象を収集し、これらを通じて、アメリカ社会の「今」の一段面を切り取ろうとする作業である。

今回のフィールド・ワークで収集した事象は、先にも述べた通り、アメリカ合衆国の街角で日常見られるものばかりである、しかしながら、日本においては、中には類似したものは見られるものの、その基本的な発想や、表現の仕方など、やはりアメリカ合衆国ならではと思わせるものが多い。そして、そこにこそ、さまざまな価値観を含むアメリカ合衆国社会の特質が表象されているのではないかと、筆者には思われるのである。

桜井哲夫は、小田実の『何でも見てやろう』におけるアメリカ理解が「文化の相対化」という視点であって、新しい理解であると評価しているが、これを紹介する上で、小田の「アメリカ社会を見ると、ひとは三段階を通過する」という部分を引用する。その三段階とは、「第一段階 無邪気なおどろき。金持ちだなあ、素晴らしいなあ、というもの。第二段階 何だ、こんなものは日本にもある。いばるな、というもの。第三段階 この社会は目に見えないところに途方もなくお金をかけた底知れぬ豊かな社会であることを知る。」¹ 実は筆者も同様の実感を持った。今回の研修で経験したことであるが、多くのトイレの洗面台には蛇口が二つある。最初に降り立ったアメリカのデトロイト空港のトイレで筆者は一方の蛇口から本当に温水が出るのに驚かされたのである。アメリカでは空港に限らず、駅、博物館、劇場、野球場など、不特定多数の集まる多くの公共の場所ではほとんど温水が出る。翻って日本ではどうか。近年建設されたばかりの立派な公共施設でも、(ホテルは別として)実際に温水が出る場所は稀なのではないだろうか。二つの蛇口があっても両方とも水しか出ない。設備があっても運用されないのである。筆者のこの体験は実に些細なことであるようにも見えるが、ここにアメリカ社会の底知れぬ奥深さが顔を覗かせているように思うのである。往々にしてアメリカ社会の分析といえば、その大量消費ぶりがクローズアップされる傾向にあるが、ハードばかりではなく、ソフトの充実によってそれが支えられている事実を我々は見落としてはならないだろう。

サン・フランシスコ近郊、カリフォルニア州立大学バークリ校付属の東アジア図書館は、40万冊以上の日本関係書籍を収集するアメリカ最大の東アジア研究施設として知られている。同図書館の責任者、石松久幸の話によれば、バークリ校の全学生数約3万人に対する図書館全体のスタッフは非常勤も含めて約4000人であるという。駆け足の訪問ながら、図書館の本館も見学させていただいたが、地下4階に及ぶ巨大な書庫と全てがコンピュータ管理された配架システムだけでなく、館内の随所に陳列された数多くの貴重な書物(筆